

コメント：アメリカの学校スポーツの現状と日本との比較検討

柴 崎 涼 一

アメリカの大学スポーツの現状を日本に紹介する記述は、突出している問題点（過熱化と興行化、激化する選手獲得競争、学業軽視、人種差別、麻薬禍等）を指摘した否定的な見方と、その自由な雰囲気や華やかさを礼賛する肯定派とに大別されるが、アメリカ大学スポーツの構造にまで踏み込んで分析をしたものはやや少ないように感じられる。だが実際にアメリカの大学スポーツの運営形態は日本のそれとは根本的に大きく異なっており、我々が無視できないような要素がそのシステム内に数多く存在しているように思える。それらの中でも最も特徴的なのは、大多数の大学が所属している全米学生体育協会（NCAA）が強力なリーダーシップを発揮して、スポーツのシーズン制、リクルーティングと奨学金、最低学力基準などのルールを設定することにより、大学スポーツの健全な発展に努力している点であろう。その結果、前述のような問題を内包しながらも、アメリカの大学のスポーツ界では参加する選手たちの意志や自主性はかなり尊重されていると言ってよく、従って前時代的な精神主義や封建性がいまだに根強く残っている日本の大学スポーツ界にとって、アメリカのシステムの合理性を学ぶことは大いに価値があるのではないだろうか。

しかしながら我々日本人がアメリカの学校スポーツを観察する際には、華やかな大学スポーツよりもむしろ高校以下のレベルに注目すべきであり、それは日米の学校スポーツの形態の違いが高校以下のレベルでより顕著になっているからである。まず、大学も高校も中学もほぼ同様な運営形態が取られている日本と異なり、アメリカでは大学レベルと高校以下のレベルには完全に一線が敷かれている。全国から優秀な選手を競って集め、全米一を目指して激しくしのぎを削っている大学レベルとは違い、高校以下では全国大会は全く行なわれず州内選手権が最大の大会となっており、従っ

て高校以下のレベルの学校スポーツの過熱度は大学レベルと比較してはるかに低いと言える。加えてスポーツの優秀な中学生の大多数が地元の公立校に進学するため、アメリカでは高校入学時の選手獲得競争は全く行なわれていない。またシーズン制のおかげで勉強とスポーツの両立も決して難しいことではなく、ゆえにスポーツ参加が選手に不利益をもたらすことはほとんどないと考えられる。一方、日本では競技力向上の名の元に学校スポーツにも低年齢化の波が押し寄せており、10月に出された保体審の答申案からも明らかなように小学生の全国大会の実施や体育系の中学校の設置などまでも推進されようとしている。またスポーツを強くすることが多大な宣伝効果を生み出すため高校間での有望中学選手の獲得競争は熾烈を極めており、その上シーズン制は実質的に存在しないことでスポーツ一流校の選手たちは年間を通して試合や練習に明けくれる生活を余儀なくされ、文武両道は至難の技となってしまっているのである。このように日本では運営面でもスポーツの現場においても大人主導型で物事が進められ、選手たちは学校や指導者の敷いたレールの上をただ走っているだけの感が強いが、アメリカでは問題の多い大学スポーツ界でさえも選手たちの学生としての立場を十分に考慮して運営されており、また高校以下のレベルへは大人たちの利害がほとんど及ばず、コーチの指導法の違いとも相まって参加する選手たちがスポーツの場で真の主役になれていることは間違いない。従って学校スポーツは本来誰のためにあるのかを考えた時には日米どちらのスポーツシステムがより健全であるかは明白であり、我々は競技力向上などに目を奪われて参加する選手たちをスポイルすることのないように、アメリカのシステムも参考にしながら今後の進むべき方向を検討していかなければならないであろう。